

# 「我が人生思い残すことなし」第3章

きたごう はると  
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ = 祖父明男の通夜の席向かう道中、雄大は明男の人生に思いをはせその生き様をもっと知りたいと感じていた。式場に到着し2人は親族に歓迎されながら、明男の眠る奥の間に進むのであった。

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 [www.kyodo-keiei.co.jp](http://www.kyodo-keiei.co.jp))

## 2. 追悼

「もし良かったらここにおにぎりあるし食べてええで」美子は祭壇の間に行く途中、テーブルにおいてあるお盆を指さして勧めた。「ありがとう。おばあさん。でも飛行機でお母さんが作ってくれたお弁当食べたので大丈夫です」はるかが丁寧に礼を言った。「そうか。はるかもすっかりええお姉さんになって」「さあ、じゃ行こか。こっちゃ、さあお入り」敷居をまたぐと正面に周りを花に囲まれた「おじいさん」の顔写真が眼に飛び込んで来た。雄大たちは瞬時に緊張を覚えた。恐る恐る進み、棺の前まで来た。辺りには誰もなく、自分達3人だけだった。午後6時の通夜開始までまだ3時間あった。「お兄ちゃんこれ」はるかが横から数珠を差し出した。雄大は静かにそれを手にするとそのまま手を合わせ、目を閉じた。はるかもすぐ後に続いた。「こちらのお香をどうぞ」と美子が言ってくれた時、雄大はまだ香典を渡していない事に気が付いた。『ま、いいか。後で』すぐに一人で思い直した。お香を一つ摘んでは香炉の中へ。2、3度繰り返し、また手を合わまた手を合わせた。『大丈夫。母が言ってくれた通り出来た』心の中で確かめると少し落ち着きを取り戻した。「さあ。おじいさんの顔見てあげて。どうぞ」美子がそう言うと棺の窓を開けて見せた。雄大が恐々覗き込むと予想外の穏やかな表情につい惹き付けられた。雄大は人の亡骸を見るのは初めてだった。はるかはどうしても目を向ける事ができず、目を閉じたままだった。「ええ顔るやろ」「最後はほんと眠る様に・・・」と言って美子が声を詰まらせた。その瞬間雄大たちにも急に込み上げるものを覚えた。美子は何とかとりなおすと

「雄大とはるかにいつまでも見守ってると伝えてやってくれ。と言うたはったで」と、一気に吐き出した。それを聞いて雄大とはるかはもう溢れ出す涙を止める事はできなかった 「ではこれより先は故人の近親者のみで最後の時間を過ごさせていただきますので、皆様におかれましては準備



のできた方より順次お進み下さいませ。本日はお忙しい中ご参列頂き、誠にありがとうございました」司会者が閉会の言葉を述べ雄大は通夜の間中ずっと明男の人生を想い。激変していく時代の間で翻弄されながら、本当に幸せだったのか。ということに確信が持てず考え続けていた。「雄大はるか。疲れたやろ」いつの間にか美子がそばに来て気遣った。「いえ大丈夫です」「そうか。そしたら向こうの部屋でごはんの用意できてるから行くか？今日はここで朝まで泊ま(次のページ)

りやしな」「ほんで明日はいよいよおじいさんと本当のお別れや」「はい。わかりました」「本当に雄大とはるかには素直でええ子やな。さあおいで」雄大たちは美子と一緒に奥の座敷の広間に移った。そこには四方に置かれた食卓の膳を囲む様に20名程の座布団が敷かれており、すでに半数程の人が腰を下ろし思い思いにそばの人同士が語っていた。「あ。雄ちゃんか。はるかちゃんも。どうぞ、こっちいらっしゃい」真っ先に高子が隣の場所を勧めてくれた。「そや。早よおいで」すぐに声を掛けたのは耕造だった。「ほなみんなそこに座らしてもらおうか」美子が雄大とはるかを促した。「はい。ありがとうございます」雄大たちはぺこりと頭を下げた。「じゃみなさん。後からまた来られるし、用意できた人から頂きましょうか」「そやね。ほな遠慮なくよばれましょ」誰からともなく場をとりなし、各々のグラスにビールが注がれ始めた。

「そうか。君が雄大君か。札幌からやてな。2人だけすごいな。そらわざわざおおきに」耕造が語りかけた。「やっぱり大志とよう似とるな」「そういえばお父さんいんようになってまだそのままか?」「はい」雄大は小さく答えた。「あ。ごめんな。悪い事聞いて」耕造が察して取り成した。



た。「いいえ。それより昔のおじいさんはどうだったんですか?」

雄大は先程からずっと気になっていた昭男の人生を少しでも知ろうと思いついて切り出してみた。「どうって?」耕造が困惑気味に聞き返した。「いや。その～。暮らしとか、人柄とか」

「それやったら高々ばあさんの方がよう知とんのんちゃうか?わいは戦争終わってすぐ名古屋の店に奉公に出たさかい。あんちゃんとはそれから

殆ど会うてへんねん」「ちょっと。あんたにばあさん言われたないわ。まー、それはえええとして、ほんなら私から話ししようか」。 「戦争終わった時、うちの兄弟とうちらのお母さん、う～ん、つまりあんたらひーばあちゃんな。それは広島におってん。ほんでその時に……。あんた原爆落とされたんは知ってるか?」「はい」「そうか。感心やな」「おばあさん、みんな学校で習ってます」はるかが説明した。「そうか。それやったら話は楽や」「それで、しばらく変えおんへんかってん。でもな。昭男じいさんだけは一人神戸の家に残ったはったんで、それからもずうっと一人で居やはってん」「でも、食べて行かなあかんやろ。ほんであっちこっちの壊れた家の修繕手伝って働いたはった。だからそれからずっと大工の仕事したはったやろ」「私らが戻れたんは鉄道が直った1ヵ月以上後やったかなー。それから兄弟5人とひいばあちゃんと6人で小さい1間の……。あ、1部屋いう事な。その家で暮らしとった。うちらのお父さん。つまり、あんたのひいじいちゃん戦争中に出て行っておらんようになったから。昭男じいさんは一家の大黒柱として夜明けから毎日、休みなしで働いたはったわ。まだ小学生の妹3人おったしな」「ひいおじいさんも家出されたの?」はるかが悲しそうに聞いた。「そう。後で居場所分かったんやけどな」「昭男じいさんは必ず日本を復興されたる。そんでアメリカ抜いて、また戦争して今度は絶対勝ってやるんや。っていつも言うたはった。でもうちらは原爆知ってるやろ。あんな恐ろしいことは二度と嫌や思てた」。